

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

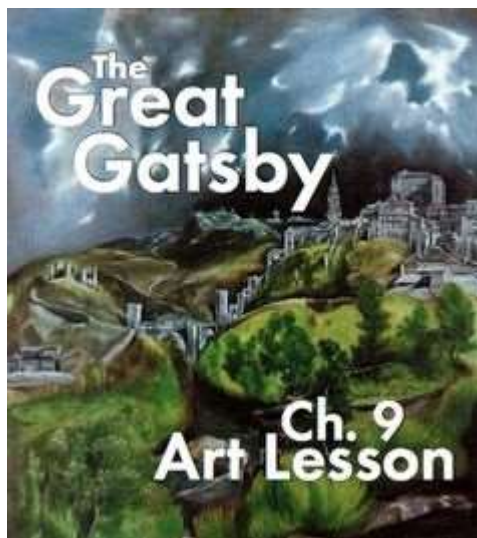
今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第九章で出てきたエル・グレコの絵です

第 21 回のツイキャス読書会の課題図書は、スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『グレート・ギャツビー』感想文

『僕は気が向くと書棚から「グレート・ギャツビー」をとりだし、出鱈目にページを開き、その部分をひとしきり読むことを習慣にしていたが、ただの一度も失望させられることはなかった。一ページとしてつまらないページはなかった。なんて素晴らしいんだろうと僕は思った。』（ノルウェイの森より引用）

ギャツビーは、上流階級の娘デイジーとの出会いによって、自分にはお金も家柄も何もないことを痛切に意識する。デイジーとの交際を可能にしているものは、将校の軍服だけであること、つまり「軍服という魔法のマンント」だけであることを意識した。自分と上流階級との間には、「目に見えない厳しい障壁」があることを思い知らされる。

デイジーと恋に落ちることで、その理念は失われてしまい、彼の人生は混乱をきたし、秩序をなくしてしまう。

でも結局、デイジーは、トムと同じ思慮の欠ける人物で自分さえ良ければ良くてお金が好きな人なのかな〜と。

ニックがトムにあなたの奥さんが人を轢いたと伝えなかったのは、ギャツビーに対するデイジーの尊厳を守ったのだと思いました。

T・J・エックルバーグ博士が、交通事故を目撃していたので、トム夫婦にもいつか天罰が下されるのではと感じました。

これからもトムは他の人と不倫を続けると思います。

ギャツビーがピンク色のスーツを着ているのを、トムに馬鹿にされますが、僕は貧しかった田舎者のギャツビーが最高のお洒落をして、デイジーにアタックする姿勢をみせてくれたので素敵だなと思いました。

好きな場面は、ニックがギャツビーの家の階段の卑猥な落書きを消してあげるところです。

やはり、最後の「でもまだ大丈夫。明日はもっと早く走ろう〜」という名文章で何度読んでも素晴らしいなと思いました。

正直者と言いつつも、ニックが正直に語られていない部分を想像して読むのもこの本の魅力ではないかと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 『グレート・ギャツビー』感想文

ギャツビーという人は、お金の力でデイジーとの失われた時間をとり戻そうとするかなり強引な印象を持ちました。

ギャツビーもデイジーと離れたくて離れた訳ではなく戦争という理不尽な理由ではあったけど私はそれがなくてもデイジーとはうまくいかなかったのではないかと思う。

ギャツビーは努力によりお金、力を手に入れたけれどもそれだけではどうにもならない、デイジーや、トムとは住む世界が違うような気がしました。二人はたまたま交わる点もあったけど、それは一時的なもので同じ道には行けない、そんな気がしました。

デイジーも本当に愛していたならトムと結婚することもなかったと思うし、ギャツビーはお金も力も手に入れたけれどもトムにあるような良い家柄というバックボーンのようなものが無い事にもデイジーは不安に感じたのではないかなと思うし、そういう事が、家柄の良いデイジーには大切な事だったのかもしれないなと思いました。

トムの事を心から好きでなくてもギャツビーの所へ行くという決断は最初から無かったような気もしました。デイジーは今の生活は幸せではあるけど、トムが浮気をして自分の方をちゃんと向いていないという淋しい気持ちだったところにギャツビーに会って、懐かしさもあり、ステキになったギャツビーに惹かれていただけだったように思いました。

対岸のお屋敷からデイジーの家を眺めて、想いを馳せるだけなら良かったのになと、私は思いますがギャツビーにとってデイジーが再び自分のところに戻って来てくれる為だけに生きてきて、今までの人生をかけたのだから後悔などなかったのかもしれないと思いました。

(おわり)

## 『親愛なるデイジー』

「ああ、あなたはあまりに多くを求めすぎる！」

デイジーがそう言った瞬間から、物語の展開がガラリと変わっていった。それまではギャツビーとデイジーの再会が、私には宝石のようにキラキラ輝いて見え、まるで夢見心地だったのに。

デイジーは、ギャツビーの前で「一度も夫を愛した事がない」と言い切ることができなかった。私は読みながら、ああやっぱりそうだよねと現実に戻された。その後のデイジーの態度の変化に戸惑いつつも、私にはデイジーの気持ちもわかるので、後半はつらい読書だった。

夫に神を見出せなくなった妻はどうなるのか。この小説の一つのテーマのように思う。デイジーの行き着く先は残酷で、生々しい。何が生々しいかと言うと、最終的にデイジーの「自己」が真っ二つに割れてしまった事だ。マートルを轢いた事への社会的手続きを行わず自己保身の為に身を隠し、ギャツビーから離れ夫とともに現実的な利害を優先する道を選んだ自分。一方で、心がかなりザワついているはずだ。これから罪悪感に悩まされる日々になるだろう。その一面が彼女にまだ残されていると信じたい。なぜならデイジーは夫の不貞を知りながら、報復することをせずに我慢してきた女性だ。うまく言えないが、ここは重要だと思う。

しかし、いつだってデイジーにとってどの男性を選ぶかは人生の分岐点であり、立脚点だった。そうする事でしか生きていけない。これがデイジーを貫く真実であり、まさに女性の真実であるようにも思える。連れ合いに神を見出せなくなった女性は限界点を越える事が出来るのか？出来ないのか？

そんな事ばかり考えると全く気分が塞いでしまうので、登場人物を俳優に例えてみた。

デイジーはビバリーヒルズ青春白書のケリー役ジェニー・ガース。トム・ブキャナンはチャック・ウィルソン。ギャツビーはマイケル・ジャクソン。この配役には少し自信がある。ただ、語り手であるキャラウェイはずっとイメージが湧かないままだった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『グレート・ギャツビー』感想

「もっと注意深くなるか、あるいは運転をまったくやめちゃうか、どっちかにした方がいい」と運転に心許ないミス・ベイカーに対して、ニックは忠告する。

「だって、他の人が注意してくれるもの」

「要するに、誰かと誰かがぶつからなきゃ、事故なんて起きないわけでしょう」と、ミス・ベイカーは言い張る。

「じゃあもし君が、君と同じくらい不注意な人間に出くわしたとしたら、そのときはどうなるんだろう？」

そのもしもが起きてしまった。自らの不注意に気がつかなかったギャツビーとデイジーだ。

ギャツビーは、自らの空疎な体をデイジーへの想いだけで満タンにしてしまった。デイジーも現在の状況よりも、恋の思い出に酔いしれてしまう。しかし、トムへの発覚と同時にデイジーの気持ちも後退し、悲劇的な末路を迎えてしまう。ほんとに大事故だ。

結局は、その「大事故」によって、トムは不倫相手とその夫、不倫の事実を闇に葬わり、ギャツビーへの濡れ衣と漁夫の利を得てしまう。みんながそれぞれ「不注意」者同志で出会ってしまった結果だ。誰かが100%悪い訳ではなく、善悪の境界が曖昧だからこそ起きてしまった悲劇に、切なさで後味が悪い。人間には完全な「勸善懲悪」は存在しないのだろう。ニックの回想にもあるように「彼の夢の航跡を汚すように浮かんでいた、醜い塵芥」のせいなのだ。

そんな人間関係と1920年代のアメリカのバブル時代がピッタリと符合する。そんな時代だからこそ、ギャツビーはデイジーのために富豪へと駆け上がることができた。バブルの後の虚しさとギャツビーが亡くなった後の寂寥感がリンクする。ギャツビーは、1920年代のアメリカそのものだったのだろう。

でも、虚飾にまみれてみえたギャツビーに、デイジーへの純粹さが垣間見えて、私自身救われた。それが「愛」ではなく「恋」止まりだったとしても。

ニックとミス・ベイカーの仲は、ミス・ベイカーの婚約で「事故」もなく、誰も傷つけずにすんなり終わりを迎える。二人とも「不注意」者ではなかったらしい。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

## 「ロングアイランドアイスティーの悪酔い」

(引用はじめ)

「——そして言ったんだ。『神様はお前が何をやってきたか、ごらんになっている。何もかもをごらんになっている。お前は俺をあざむくことはできるかもしれん。しかし神様はあざむけないぞ!』ってな」

ウィルソンの背後に立ち、彼を見ているのがT・J・エックルバーク博士の目であることを知って、ミカリエスは度肝を抜かれた。

(引用おわり)

禁酒法(きんしゅほう、英語: Prohibition)は、1920年から1933年までアメリカ合衆国憲法修正第18条下において施行され、消費のためのアルコールの製造、販売、輸送が全面的に禁止された法律であった。

なぜ、トムが、マートルとニューヨークのアパートメントの一室で密会したとき、酒をカギの付いた戸棚に隠していたか? そして、プラザホテルの一室で、ミントジュレップを飲むために、わざわざ、彼は、ウイスキーを自宅から持参したのか? なぜ、ギャツビーのパーティーにあんなにたくさん人が訪れ、シャンパンやカクテルであればどみともないまでに泥酔したか? (その上、帰りに、ある車が路肩の溝に脱輪してしまっているのに、飲酒運転であることを、見物人も含めて認めようとししないのか?)

理由はすべて、禁酒法というくだらない法律のせいである。アメリカ人は、禁酒が、社会秩序に道徳をもたらすと本気で考えていたのである。

とんでもない偽善がまかり通っていた時代である。

しかし、とんでもなくピュアの時代でもあった。それがJazz Ageだ。

禁酒法という悪法のおかげで、ギャツビーは、密造酒の売買で一財産築くことができた。そして、どこかいかわしい紳士に生まれ変わって、デイジーの前に再び立つことが出来た。

それは、貧しかった彼の人生を逆転させ、切ない想いをかなえるためのラストチャンスだった。

ギャツビーは、計画通り、デイジーをパーティーに呼ぶことに成功したが、彼女は酒を飲まなかったので、あの乱痴気騒ぎをお気に召さなかった。

ギャツビーは、とんでもなくピュアでありながら、とんでもないウソつきだった。

(おわり)



メルマガ読者 イノマンさん もう一つ書いていただきました。パロディ版

## 『4月のある晴れた朝にグレート・ギャツビーを読んだことについて』

とにかく、この話は『昔々』で始まり、『悲しい話だと思いませんか』で終わる。

昔々(1922年)、あるところにギャツビーとデイジーがいた。

二人は、5年前ぱったりとめぐり会うことになる。

「驚いたな、僕は君を捜していたんだよ。信じてくれないかもしれないけれど、君は僕にとって100パーセントの女性なんだよ」とギャツビーはデイジーに言う。

デイジーはギャツビーに言う。「あなたこそ私にとって100パーセントの男性なのよ。何から何まで私の想像していたとおりに。まるで夢みたいだわ」

それから二人は、飽きることなく愛を語りつづける。

しかし、一ヶ月後、ギャツビーは戦地に赴くことになる。

デイジーは、いつまでも待っていると答える。

5年後——

ギャツビーは、野心のためにあらゆることをして金持ちになっていた。

そして、デイジーが来るかもしれないとド派手なパーティを開催していた。

デイジーは、ギャツビーの帰りを待てず、超大金持ちのトムと結婚していたが、夫が不倫していたので不満があった。

隣人のニックと知り合い、そのおかげでギャツビーとデイジーは再び再会を果たした。

ギャツビーはデイジーと5年分の空白を埋められると本当に信じていたが、夢半ばで、マートルの不倫相手であり自分の妻を殺したと勘違いされた為、ウィルソンに殺されてしまう。

親友のニックは必死にデイジーを葬儀に呼び掛けるも、来ない。

デイジーは、思慮の欠けるすっかり金にまみれた人になってしまっていた。

悲しい話だと思いませんか？

\*

なんとなくですが、僕がニックなら、ギャツビーの副業にのってしまっていたと思います。（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>